



Title	ヘルマン・ブロッホの『方法論的ノヴェレ』と『罪なき人々』について
Author(s)	岩田, 聡
Citation	独語独文学科研究年報, 11, 69-80
Issue Date	1985-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25694
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_P69-80.pdf



ヘルマン・ブロッホの『方法論的ノヴェレ』 と『罪なき人々』について

岩 田 聡

1

『罪なき人々』の第二の物語には風変わりな題名がつけられている。この題名『方法論的に構成された』は、1918年に文芸誌 "Summa" に発表された原作の題名『方法論的ノヴェレ』に由来している。原作がロマーンに編入されるまでには数次にわたる加筆・訂正が行なわれている。しかし同時代の作家を風刺した個所の削除、人物名の変更および結末の一部の手直しを除けば、いちおうは原型を保っているといつてよい。旧作は題名が示すように、ひとつの方法論に基づいて構成された実験的ノヴェレである。といつてもこの実験はあらかじめ失敗を目的としたもので、実験の失敗による問題提起にむしろ重心が置かれている。その意図は作中に表明されているように自然主義文学の方法論、とりわけその環境決定論の機械的で、物的な人間理解に対して、「人間を環境、情緒、心理などの成分から一義的に決定することができる」と考えることは、自然主義者たちの思いあがった誤解である」(5, 43)ことを証明することにある。

このノヴェレに関しては、すでにブロッホの短編集の編者 P. M. リュツェラーがその後書きで論じているので、以下にその論旨を辿ることにする。¹⁾

ブロッホがここで選んだノヴェレという形式は、古典主義からリアリズムを経て印象主義に至るまでのノヴェレ作家の理解によれば、ゲーテ的な「前代未聞の出来事」あるいはテーク＝シュレーゲル的な「転回点」にその特徴がある。仮に自然主義の硬直した環境決定論を承認した場合、そのどちらも起こり得ないことは明白である。それはノヴェレの不成立を意味する。逆に、「前代未聞の出来事」、「転回点」が生起するとき、ノヴェレは成立するが、決定論はくつがえされる。主人公に選ばれるのは、環境によって完璧に規定された思考および行動様式をみせる若い高校教師である。地方都市の中流階級に属するこの数学教師には平均的な特性以外の特性は認められず、いはば最小限の人格から構成されている。物語の冒頭部分を『方法論的に構成された』から引用してみよう。

平均的で誰にも共通した概念というものは、多面的な効果をもたらしてくれるはずなので、主

人公は中規模の地方都市、たとえばかつての王宮所在都市の——時代は1913年——中流階級の高等学校の助教員である人物に設定しよう。この人物は、数学と物理を教えているからには厳密な証明能力を多少はもっていたためにこの職業に就くことになったのであり、従ってまた相当献身的に、熱意をもって、かつまた幸福感に胸おどる思いで勉学に専念したであろうが、もちろん自分が選んだ学問の高度な問題あるいは原理を熟考したり探究したりすることもなく、むしろ教員試験の合格によって市民としての最高限度と、自分の専門の知的な最高限度に到達したと確信している、と仮定することができよう。というのも、平均的なものから構成された人物というのは、事物や認識の仮構性など気にかけないばかりか、そのようなものはばかげた思いつきである、としか考えないもので、彼が知っていることといえただ操作の問題、分割と組み合わせの問題であり、実存の問題などは全く関知するところではないのである。(5, 33)

このような、あまりにも平均的で没個性の人物、「非-自我」がいったいノヴェレの関心の対象になり得るのだろうか。「何か生命のない物、たとえば一本のシャベルについて物語る」(5, 34)に等しくはないのかという疑問が語り手によって提起される。だがこのような機械のごとき人間でも、性的な葛藤状況におかれたならば、「その行動の自動性も人間的な決断義務に変化することがあるかもしれない」(5, 35)との想定に基づいて実験が続けられる。相手に選ばれるのは下宿の娘である。その理由は、それ以外の相手では不自然な構成となるというものである。物語はここからふたつの展開の可能性を示す。ひとつは、このふたりが恋愛の成立の偶然性、被制約性に悩みはじめ、ついには一回限りの愛、絶対的な愛の証を求めて情死を試みるというもので、これはノヴェレの要諦を満たす結末ではあるが、環境決定論と矛盾することになる。もうひとつは、情死という「卑俗なものから永遠なるものへの道」(5, 44)が>>予定前に<<中断されて、「恩給資格」のある高校教師と下宿の娘という小市民夫婦が誕生するというものであり、これは決定論を踏まえた結末といえる。前者が採用されると自然主義的な方法論が破産し、後者を選ぶとノヴェレは成立しない。この解決不能のジレンマに直面して、ふたつの展開の可能性は非現実話法 (Modus irrealis) という文法形式で可能性として呈示されるにとどまる。この結末の非完結性はふたつの意味をもっている。つまり、プロットは自然主義の文学の方法論の矛盾をあばいただけにとどまらず、結末を未決定のままにしておくこと、すなわち物語ることの断念、不能においてノヴェレ形式の形骸化をも露呈させたのである。以上がリュツェラーの解釈の論旨である。

ここで問題にしたいのはノヴェレ形式の形骸化ということではない。『罪なき人々』への編入とともに、旧作の題名から"ノヴェレ"の部分が削られたことが示すように、ここでは独立したノヴェレ形式の枠はずでない。またこの編入はたんに形式上の変化にとどまらず、さらに内容的な変化をもひきおこしている。物語が呈示した考えられるふたつの結末のうち、情死の瞬間におい

て体験されたであろうエクスターゼ、超現実的な体験はきわめて稀な可能性とされ、別の物語であらためてテーマ化されることになって、その結果、情死が》予定前に《中断されて平凡な小市民夫婦が誕生したことの可能性が強調されているのである。

しかしながら、このことはブロッホが自然主義文学の方法論に同意した、というのではもちろんない。元のノヴェレが数回の手直しを経て、ロマンの一部になるまでに30年間が経過している。この最も初期の物語に対するブロッホのこの執着ぶりは、自らこの作品がはらむ問題性の大きさを暗示している。何度か改稿を重ねたことは、そのたびにこの物語をながめるブロッホの視点が移動したことを物語っている。「人間を環境、情緒、心理その他の類似の要素から一義的に決定できると思い込む」自然主義の決定論を支えているのは実証主義的な論理である。実証主義の立場からは、普通の感覚ではとらえられない非合理的なもの、あるいは数学的に証明できない現実、その存在を認められない。それは形而上的なものの存在を一切否定する徹底した反プラトニズムの思想である。30年代に精力的に発表された政治的、哲学的な論文、さらに33年に成立した小説『未知数』が実証主義批判をテーマとしていたように、この物語もまた改稿の過程で、はじめの直接的な時代関連性をぬぎ捨てて、より本質的な課題である実証主義との対決を鮮明化していったと言えるようである。

2

さて科学的な論文ではなく、文学作品において実証主義との対決を試みるとき、いったいブロッホはどのような方法論に依拠していたのだろうか。ブロッホの物語技法について考えてみる。先に引用した物語の導入部によくその特徴があらわれているあの特異な文体、語り口については、やはりP. M. リュツェラーが別の論文で言及している。²⁾ それによれば、このノヴェレの語り手「私たち(Wir)」はたんなる「私」の複数形、偽装した「私」ではなくて、auktorialな物語作者である「私」と受容者である読者との両方を指しているという。「事実として完結した、俯瞰可能な出来事の物語、それは当然過去形で語られなくてはならないのであるが、そのような物語を呈示する場合には、このErzähl-Wirを導入することは不可能なことである。受容する読者には終わってしまった出来事に介入するすべがないからである。」³⁾ ところがこの物語は「意識的な構成で」、「さまざまな可能に従って練り上げられていて」(6, 23) Erzähl-Wirのauktorialな一方が新しい構成の可能を示すとき、そこには受容者の側から予想される同意や異議も考慮に入れられている。こうして物語は、明白な蓋然性を基準にして創作者と読者との共同作業のなかで組み立てられていくのだという。

リュツェラーが指摘するように、ここでは作者ばかりでなく読者もまた創作の現場に関与してい

るような印象を呼び起こすことは確かで、そこからこのErzähl-Wirの導入が物語ることの "Demokratisierung" と定義され、ブロッホの文学の倫理性へと議論が展開されていく。しかし、時として折衷主義とまで批難されるほど、多様な文体を駆使することにかけてはほとんど例をみないブロッホにおいても、この語り方はそれほど頻繁に用いられたわけではない。さらに、「私たち」が作者と読者の両方を含めて使用されているならば、それは古典的なIch-Erzählsituation⁴⁾によくみられた読者への語りかけの可能性を必ずしも排除しないはずであるが、ここにはそのような語りかけ、呼びかけは見当たらない。逆に、原作でたびたび使われた "Wir" は最終稿ではいちぢるしい減少すら示している。したがって、読者の側の「出来事に介入」している印象を、ただちに「共同作業」あるいは物語ることの "Demokratisierung" へと結びつけることには異論の余地があろう。

「私たち」がもたらす「出来事に介入」している印象が、両者の視点の一致、さらに言えば存在領域の一致に由来するのであってみれば、あえて両者を切り離して考える必要はないであろう。この「私たち」があくまで一般的で、抽象的な「私たち」であるならば、それはどこか数学の証明問題を解くときに使われる「私たち」と似てはいはしないであろうか。そのような類推を誘うほどに、物語の展開の論理そのものが数学的である。物語は読者の目の前で、あたかも確率の問題の解法をみるかのようにできあがっていく。ジョイスの小説名を借りるならば、この物語もまたもうひとつの『ワーク・イン・プログレス』と言えるであろう。Erzähl-Wirの導入でブロッホが意図したのは、物語ることの "Demokratisierung" というより、むしろ "Mathematisierung" (数学化) とでも名づけ得るような効果であったのではないか。つまり、平凡な高校教師ツェハーリアス、「事物や認識の仮構性についてはあまり頭を使わず」、「ただ操作の問題、分割と組み合わせの問題しか知らず、決して実存の問題を知らない」数学教師の現実を、彼の現実性において形象化する技法として、物語りの "Mathematisierung" が必要とされたのであろう。

この物語りの数学化は裏をかえせば、ツェハーリアスが自分の生きる生を数学的な論理に従って構築していることの比喩なのである。人は他者の生に対してばかりでなく、自己の生に対しても物語に対する物語作者の関係にあることを指摘したのはブロッホの同時代人ローベルト・ムーゼルであった。「人生の法則というものは、……物語的な秩序の法則にはかならないのである。」⁵⁾ この物語の秩序を規定するのは、まさに数学の公式なのであるが、ただし数学といっても、それはツェハーリアスにとって、「彼か彼の生徒が解かねばならない」練習問題<<のことであった。>> (5, 33) そしてまたツェハーリアスの生活につきまといっている滑稽感は、「代数の公式」と「生の形式」とを区別しないところに生じるイロニーなのである。

このように、描写の対象が描写の技法を決定づける、逆に言えば描写の技法から描写の対象が自然に生じてくるような関係は、ブロッホが『ジェームズ・ジョイスと現代』(1936)で『ユリ

サイズ』の文体を論じたときに、「描写対象と描写手段の一体性」として定式化したものであった。

古典物理学は探究されるべき現象を観察し測定することに満足し、観察媒体すなわち見る行為を考慮するのは、この媒体中に人間の感覚器官の欠陥によってか、あるいはまた地上の測定器の欠陥によって誤りの源が生じる場合に限られていた。ところが相対性理論が発見したのは、それにとどまらず原理的な誤りの源、つまり見る行為そのもの、観察そのものの存在であった。そしてまた、この誤りの源を回避するためには観察者とその見る行為、観念上の観察者と観念上の見る行為とが、観察の場に算入されなくてはならないこと、要するに、物理学的客体と物理学的主体との理論的統一が産み出されねばならないということであった。(・・・)古典的な小説は現実の生活と心的な生活を観察することで満足していた。この観察を言語という手段で記述することで満足していた。(・・・)描くことは描いたが、そのさいに言語は既製の道具として利用された。ところがジョイスのやっていることは、はるかに複雑なのである。彼にあっては、対象を無造作に観察筒中において記述することは許されず、描写主体すなわち「理念としての語り手」と、それと同様に描写対象を記述するのに用いる言語とが、描写の媒体としてそこに含まれるのだという認識がいつも働いている。彼が作り出そうと試みているのはきわめて広い意味での描写対象と描写手段との一体性なのである。(9/1, 77 f.)

物語の「数学化」がツァハーリアスにとっての現実を、ツァハーリアスの現実性において描いているとすれば、それはまた彼の極端に実証主義的で合理的な世界像が、「彼女の肉体以上のものを愛する」(5, 39)という「代数の公式」では解けない」練習問題に直面したときに経験する崩壊の過程をも数学的にとりだしてみせることになるであろう。むしろ、この語り口は合理的な世界像が、それ自身の論理的展開のはてに自己解体し、人間の生に固有な非合理性を合理的に顕現させるための逆説的な手続きなのである。わざわざ類型化された平凡な数学教師の、平凡な恋愛が物語られることの意味もまた、この合理的な世界像の破産が他動的なものではなく、自己解体的であることに求めることができる。⁶⁾「現実はおよそありえないような理論体系にも耐えるもので、理論が自分のほうから破産宣言をしないうちは、その理論は信頼によって支えられ、現実はそれにおとなしく従う。破産宣言がなされて初めて人間は目をこすり、ふたたび現実へと向かい、自己の知識の源泉を、理性の推論の分野から生きた経験の分野へと移すのである。」(1, 535 f.)

「彼女の肉体以上のものを愛すること」という課題は、ツァハーリアスにとって解答のない問題であった。なぜならそれは、疑問に疑問が連らなり、結局は自己の存在、人間の存在の根拠への際限のない問いかけをもたらすだけで、この疑問の連鎖はどのような静止点も見い出すことができないからである。「自分が偶然に、この地方都市の高校教師になったということばかりでなく、また

自分が、偶然はかならずフィリッピーネの母親の家に間借りしたということばかりでなく、あつという間に成就した愛のはじまりのめくらめっぽうな偶然性が、いまの彼には怖ろしいもの感じられるのであった。さらにまた、それ以後彼女の手から驚くほど湧き上がってきた欲望が、いまでは自分が売女と罵っている例の女たちの腕のなかで経験した欲望とほとんど区別できないという認識もまた怖ろしいものだった。・・・」(5, 39 f.) もちろんこの愛が「一回性」(Einmaligkeit)を欠いているということは、ツァハーリアスにとってだけでなく、当然またフィリッピーネについても想定しなくてはならない。この想像上の不貞、不貞のたんなる可能性だけでも、「つねに>正しい答えがでる<ことだけに執着する」(5, 33) ツァハーリアスをして、絶望的な嫉妬に駆り立てるのに不足はなく、際限もなく疑いつづければならないという苦痛に満ちた無限の運動から解放してくれるのは死しかないと結論させるのである。こうして、フィリッピーネの肉体以上のものを愛するという>練習問題<を通じて、ツァハーリアスは無限というものを体験しているのである。ここに出現する無限の空間に迷い込んでしまうと、それまで確固とした自明性をもって存在していたものが突然疑わしいものになる。「事物と認識の仮構性」が明るみに出され、深淵が暗い口を開けている。

3

一般に、人間の思考が無限性の問題にゆきあたるとき、思考はその問題をどう処理するか、そしてその処理の仕方が、逆に人間をどのように規定するかを、ブロッホは三部作ロマン『夢遊の人人』のなかのエッセイで論じている。この『価値の崩壊』というエッセイにおいて、ブロッホは「絶対性の喪失の問題、どんな絶対的真理も絶対的価値も、従ってまた、絶対的倫理も存在しない相対主義の問題」(10 / 2, 195) という生涯にわたるテーマを多面的に論じているのであるが、ここではその論理的・歴史的な議論の要点を手短かにまとめてみる。

およそ疑問の鎖というもの、すべての存在に関する疑問の鎖はもともと決して終結することがない。この鎖がどこで中断されるかは、真理感情、明証感情にかかわることで、結局はどのような公理体系が効力をもつのかということに帰着する。この疑問の鎖を停止することのできる公理は、形式論理的な公理ではなくて、内容的な公理である。このような公理をブロッホは、コスモゴニー(Kosmogonie)の公理とよんでいる。コスモゴニーという語の原義は、宇宙およびその天体の生成と発展に関する説、すなわち宇宙創成説であるが、ここではそのような原義も含めて、一時代の世界像、あるいは時代精神の世界理解の図式という意味で用いられている。

たとえば、原始人の汎神論的なコスモゴニーにおいては、このような公理の数は無限といっているほどの数になる。すなわち、彼らにとっては世界のどの事物も独自の生を営み、どの樹木にも独

自の>>神<<が住んでいるからである。したがって、世界の事物に関する疑問はどれも最初の一步でこの公理と出会うことになる。逆に、汎神論的なコスモゴニーの対極にある一神論的なコスモゴニーの場合には、存在論の鎖の静止点は唯一神たる>>神<<にあるわけで、疑問の鎖は万有の根拠たる>>神<<に合流するまで無数に連らなる。しかし、公理の数はひとつしかない。

ところで、このような内容的な公理は、形式的、論理的な公理と矛盾しない関係になくなくてはならない。両者が矛盾すれば、真理性は成立しなくなるからである。内容的な公理の差異は、論理構造に対してどのような影響を及ぼすのだろうか。形式論理そのものは不変であるのに、公理体系が一定の>>様式<<を帯びるのはどうしてか、この事実をブロッホは数学的な比喩で説明する。「ある種の幾何学の作図にあっては、無限に遠い点が任意に有限な図面の内部に仮定され、この仮構の無限遠点は、あたかも実際にそれが無限に遠く離れた点であるかのように作図される。この点が無限に遠くにあるかのような作図においても、個々の作図部分相互の間の位置は変わらない。ただ、すべての尺度がゆがめられ、圧縮されるのである。」(1, 474)つまり、論理的な静止点、あるいは是認点(Plausibilitätspunkt)が、無限なものから有限で地上的なものへ移されたとき、または、その逆の場合に論理構造が受ける変化は、いはば>>尺度<<の変化、>>様式<<の変化として現われてくる。

ここにまた、ブロッホは時代による様式の差異、芸術上の様式にもっとも可視的な姿をとってあらわれる時代の思考様式の可変性の根拠をみる。人間の思考が時代ごとの>>真理<<に導かれているように、人間の行為もまた同じ>>真理<<、この場合は生にとっての>>価値<<に結びついている。「人間が何をなそうと、それはいつでも自分が是認できるもので、自分にとって真理である理由をもって人間はその行為を動機づけ、論理的な証明の連鎖のもとにおく、人間は——少なくとも行為が生起する瞬間は——いつも正しい行動をしているのである。」(1, 463)真理は思考の実現物として、従って人間の生にとってのさまざまな価値のうちでも特別な地位を占めている。思考の論理は、「たんに生の多次元性のめぐりに張りめぐらされる、いはば一次元の細い糸であるにすぎないにしても、それでも論理空間という抽象的なもののなかを浮遊しつつ、出来事と出来事の様式全体の多次元性の要約なのである。」(1, 463)

かつて、ヨーロッパの中世社会は理想的な価値中心、至高の価値、すなわちキリスト教の神への信仰をもっていた。コスモゴニーはこの価値中心から演繹され、人間はこの永遠にして無限な調和の世界秩序の一部を形成していた。信仰という包括的な生の価値に、他のすべての価値、経済、軍事、社会、芸術などのさまざまな領域でいとなまれる人間の生の価値が従属していた。信仰は、そこですべての疑問の鎖が終わる是認点であった。しかしながら、中世盛時においてキリスト教の神は無限の特性を有しつつ、同時にまた、「可視的な教会」に代表されるような「象徴形式の有限化」を招かずにはいなかった。この無限に遠い論理的な点の有限化、すなわち有限となったプラトンの

なイデーを弁証法的に解体したのがスコラ哲学であり、それによって実証主義を準備することになってしまった。こうして、中世的な教会中心のオルガノンの崩壊はふたつの位相を示す。「スコラ的な弁証法の破産宣告とそれにつづくあの——真にコペルニクス的な——直接的対象への転回である。言い換えれば、プラトン主義から実証主義への、神の言語から事物の言語への転回である。」(1, 536)

一神論的なコスモゴニーを超えて出るには、ほとんどそれとはわからぬ一步でこと足りたが、しかしこの一步は、それ以前のいかなる歩みよりも重い意味をもつ一步であった。すなわち万有の根拠が、ともかくにもまだ擬人的であった神という有限なる無限性の中から、正真正銘の抽象的な無限性の中へとさらに移されるのである。問の連鎖はもはや神の観念の中に流れ集まることなく、文字どおりの無限性の中へと入りこんでしまう。(それらは、いうなれば一点を目指すことなく、たがいに平行に走るのだ)。コスモゴニーは、もはや神の上にとどまることなく、問いが永遠に更新され得るということの上に、すなわち、どこまでも問いつづけなくてはならないという意識の上にとどまる。原物質をさし示すことも、究極の原因をさし示すことも不可能であり、どの論理の背後にもそれを超えるメタ論理がひそみ、どの解決も中間的な解決でしかなく、はてしもなく問うといういとなみそのもの他には何ひとつ残らない、という意識の上にとどまる。コスモゴニーは尖鋭に科学的になってしまった。そして、そのコトバとそのシンタクスは「様式」をぬぐい去り、数学的な表現へと変わってしまった。(1, 474f.)

疑問の鎖、是認の鎖が到達不能の遠方に姿を消した点をめざさなくてはならないという事態に到って、個々の価値領域がひとつの中心価値に結びつくことは一挙に不可能になる。解放され、自律的になった価値領域は、自己の論理をそれぞれ過激に貫徹する。商売は商売、戦争は戦争、芸術のための芸術、これらはすべてあのマキアベリズムの過激な論理性を有している。なぜなら、どの価値領域も独自の「神学」をもつからだ。この結果、かつては神の似姿であった人間にとって、もはや「その職業になった個別的価値に従属する以外に残された道はない。」(1, 498)

しかしまた、どのような価値体系においても非合理的なものの残滓が必ず存在している。自律的になった理性が超合理性におちいり、体系そのものを止揚してしまうことを防いでいるのは、この非合理的な残滓なのである。「思考という絶対的なもののそばを、その衝動、欲望、情動などの一切とともに駆け抜けていくのは、非合理的な生という絶対的なものなのであり」(1, 690)、むしろ、どんな価値体系にあっても合理的なものの悪と、非合理的なものの悪とが相互に制御しあって、いはば一時的な「均衡状態」を保っているのである。もし価値崩壊の過程が局限まで進行して、この過渡的な均衡がくずれると、「その終局には解放された自律的な理性と、解放された自律的な生

が並んで立っているのだ。」(1, 691)

このような価値崩壊の過程において、その究極の分裂単位をなすのは、価値が人間の生と結びついた概念であることからして、個人としての人間ということになる。そして、この個人が上位の価値体系に関与する度合が低くなれば、“私的神学”の領域はせばまり、自己の価値領域の外側で生起することは、ただ独断的(dogmatisch)に受け入れられるだけで、ここに因習の活動する余地が、したがって俗物的人間が成立する。「この形而上学から」追放された「人間は、・・・価値から自由で、様式から自由で、ただもう非合理的なものによって規定されるだけである。」(1, 693)

4

ブロッホが価値崩壊論で展開した現代の精神的状況は、もちろん“夢遊の人々”だけについて言われたものではない。“夢遊の人々”と同様に、“罪なき人々”もまた価値崩壊時代の人々として、この歴史法則を具体化したものといえるであろう。しかし、このことは必ずしもブロッホ的人物が歴史法則の典型化された担い手で、人間としての自由を完全に奪われていることを意味しない。「人間が」夢のような「うつけた生活をしている限り、その限りにおいてのみ、人間は歴史理論および歴史法則に基づいた認識の対象である。」(12, 111)これが歴史の法則の効力についてのブロッホの基本的な考え方であった。

ツァハーリアスの思考・行動が数学的な論理に基づいて構築されていて、そのことがまた物語のスタイルを規定していることは先に述べた。彼の思考の及ぶ範囲、その限界点は、教員試験の合格後にはもはや「未来の食堂」、「美しい木彫の食器棚」と「リノリウムの床」でしかなく、未来の妻さえもせいぜい「コルセット」と「ストッキング留め」で暗示されるにすぎなかった。もちろん、フィリッピーネにとってもツァハーリアスの存在は、「彼が日曜日にピクニックにでかけるときに乘る四等列車」と「恩給資格」に還元されてはいた。ツァハーリアスのコスモゴニーの公理、“私的神学”の始点と終点をなすのは「リノリウムの床」であり、フィリッピーネのそれは「恩給資格」であった。彼らの婚約が、他ならぬ「縁がかった光沢のリノリウムの床」の上で祝福されたように、それはまさしく因習的な結婚であり、俗物的な小市民夫婦の誕生であったし、それが時代の世界日常(Welt - Alltag der Epoche)であった。

しかし、ブロッホが描こうとしているのは、もはやどのような演繹的な体系にも服しない価値崩壊時代の、まさにこのように典型化された人物たちにおいてなお絶対的なものを、人間的な自由を求める“絶対性の火花”(Absolutheits - Fünkeln)の燃え上がる瞬間があるということである。ブロッホにおける人間存在の理解の仕方をもっとも簡潔に表わしているのは、あのプラトンの洞窟の比喩であり、ブロッホの全作品がこの主題のさまざまな変奏であるといってもよい。夢か

ら醒めても、それがまた新たな夢の圏内の幽閉でしかないという夢の牢獄。あるいは、さえぎる壁さえない限りなく広大な空間の囚われ人。失なわれた楽園の比喻。約束の地カナンをめざす疲れきった砂漠の横断者たち。しかし、この者たちにも慰めの瞬間が黙示のように訪れるのである。生の多次元性の回りに張られた合理的な論理の細い糸は、ときとして弛んだり、切れたりするのだ。

ツァハーリアスをとらえた無限の問いの連鎖は、彼に人間存在のよるべなさを認識させ、被造物の獣的な不安につき落とししたが、しかしそれは下降であると同時に絶対的なものを求める上昇の運動の開始でもあるのである。ワルター・イェンスが「夢遊の人々」と「ウェルギリウス」について言ったことは、ここでもそのまま妥当する。「分裂した世界と飛散した秩序。これが現実だ。しかし、同時にまたさまざまな次元が突然拡大される不意の認識の瞬間がある。すべてを包括し、時間を止揚する知の瞬間、死の幻視と一日の終わりの夢想、夢遊と死の瞬間の明晰がある。」⁷⁾

この体験の上には星辰がめぐっていた。そして彼は恒星の天蓋の彼方に、いくつもの新たな中央日輪の天界(Welten neuer Zentralsonnen)が彼の知の法則のままにめぐっているのを見た。彼の知はもはや彼の頭蓋のなかにはなかった。はじめ彼は心のなかに明るみを感じたように思ったが、その光は彼の自我を拡げつつ、彼の肉体の境界を越えて膨らみ、星辰にまで流れていったかと思うとまた戻ってきて、彼のなかで灼熱し、不思議な穏やかさで彼を冷やした。光は開き、無限の接吻となった。(5, 42 f.)

これは情死のエクスターゼを描いた箇所からの引用である。このエクスターゼにおいてツァハーリアスの自我は光、すなわち「絶対性の火花」に導かれて無限なものへ拡大し、そしてまたこの無限なものをおのれ自身の内部に発見するのである。それは「肉体の外部にありながら、しかもその内部に封入された和合の終点という無限遠点」(5, 22)であった。ここでツァハーリアスの自我の無限なものへの拡大、いかえればプラトンの洞窟を脱け出す体験は無限定的な無名の星辰、さらには「中央日輪の天界」などにみられるありふれた語の異様な組み合わせで暗示されている。無限なもの、絶対的なものの体験を有限なる手段である言葉で現前化しようとするとき、問題となるのは語の組み合わせ、シンタクスである。この独特なシンタクスにおいては、星、世界、太陽などの語の日常言語としての意味、ブロッホのいう「現実語彙」⁸⁾としての意味、その指示機能は現実の指示対象を失っていながら、しかも何かを指示している。いはば、抽象的な機能に還元されて利用されているのである。こうして抽象化された語はちょうど音符のように、あるいはカンパスの上の色彩のように組み合わせられ、そこに生じた「語間と行間の緊張、要するに>>間の表現<<」(4, 474)によってブロッホは言い表わし難いものを表現しようとする。他方また、抽象的なものへの還元によって言葉の意味次元は日常言語の意味の次元を越えて広がり、語とその形象は「具体的

な、しばしば日常的な事物に広大な超感覚的領域を代表させるあの形而上的な象徴性格」(5, 293)を帯びるのである。言葉が抽象的なものへ還元されているということは、また語り手自身が自らこのような形式を生みだす抽象的な機能・役割と化していることを物語っている。ここには出来事を「のぞき箱式手法」(Guckkastenmanier)で観察・記述する語り手はいない。ブロッホが「認識の焦燥」とよぶこの始源の現実をめざす音楽的、抒情詩的な文体を成り立たせているのは、やはりあの「描写対象と描写手段の一体性」の原理なのである。

ツァハーリアスによって「予定前に」中断されたこの神的な瞬間の体験の可能性は、『罪なき人々』のもうひとりの中心人物であるアンドレーアスに受け継がれる。このふたりは、原作のノヴェレの数学教師アンチゴヌスのいはば分身であり、ノヴェレの呈示したふたつの結末とその発展をそれぞれ「対位法的に」現実化していくのである。それは時代の精神が向かうふたつの対極的な道でもある。すなわち、あの始源の現実には「いまだなおしかもすでに」(5, 190)という非在の時間の様相において繰り返しアンドレーアスに予感され、このときの「5時11分」という時刻の反復はこの始源の現実の体験が地上の時間とはなり得ないこと、したがってまたその超時間性、同時性を示す。他方、中断された情死の試みはツァハーリアスを光の体験ではなく、「無限の暗闇」(5, 152)へと導き、彼はそこから「擾乱の天使」(5, 287)として「灼熱した悪の地底に墜ち、そこから人間の姿をとって這い上がったが、もちろん永遠に足萎えとなった。」(5, 287f.)そして、この足萎えの墮天使の行く先はあのヒトラー・ドイツの空前の破局なのである。

使用テキスト

テキストは、Hermann Broch: Kommentierte Werkausgabe, 13 Bde. hrsg. von Paul Michael Lützeler, Suhrkamp Verlag, Frankfurt a. M. を使用した。

テキストからの引用箇所は、本文中の()内に巻数とページ数を挙げて示した。

注

1) P. M. Lützeler: Hermann Brochs Novellen. In: Hermann Broch. Barbara und andere Novellen. hrsg. von P. M. Lützeler, Frankfurt a. M. 1973. S. 319-350. さらに、石光泰夫: ブロッホ 『方法論的ノヴェレ』, 『ドイツ短編小説の展開』, クヴェレ会, 1980, 467-485頁を参照。

2) P. M. Lützeler: Hermann Broch - Ethik und Politik, München, 1973,

S. 59-67.

3) P. M. Lützel : a. a. O., S. 64f.

4) 物語の語り手の一般的な問題に関しては、Franz K. Stanzel : Theorie des Erzählens. 2. verb. Aufl. Göttingen, 1982. を参照。

5) Robert Musil : Gesammelte Werke, Bd. 2, Hamburg, 1978, S. 650.

6) ブロッチホにおける論理体系の自己分解という考え方については、古井由吉 : ヘルマン・ブロッチホ「ウェルギリウスの死」、『日常の「変身」』、作品社、1980年、148-176頁を参照。

「論理体系の崩壊は、人が事物をあらたな眼で眺めるときに起こるのではない。むしろ、論理体系が崩れ去ったそのとき、人ははじめて事物をあらたな眼で眺めるようになる。つまり、論理体系の崩壊はあたらしい現実との触れあいによって惹き起こされるのではなくて、論理独自の領域のうちにおいて、論理が無限性の問題にゆきあたるときに始まるのである。」(同書、165-166頁)

7) Walter Jens : Mathematik des Traums, In : Statt einer Literaturgeschichte, Siebte erweiterte Auflage, Pfullingen, 1978, S. 220f.

8) ブロッチホが「現実語彙」に与えた定義はかならずしも厳密なものではなく、語のレベルにとどまらず文、さらにはひとまとまりの思想までを含むことがある。

(北海道工業大学講師)